

詠む広場

毎日俳壇

小川 軽舟選

図書館へ通ふ二人や雪柳

東京 佐灯 素秋

△評▽どういう二人なのかは読者の想像に委ねられている。清らかな雪柳の花の取り合わせがその関係を好ましく見せる。

読書する青年に花散りかかる

流山市 角田 勇

△評▽公園のベンチで本を読んでいるのか。スマホの時代になった今、なつかしく目に映る。

厨にも書庫にもラジオ春の雨

古賀市 大野 兼司

山脈をまたぐ機影や春夕焼

松本市 上月くを

春昼や杖の母待つ美谷室

流山市 小林 紀彦

新わかめひとつ覚えの三杯酢

東京 徳原 伸吉

弱りなく甲斐の山並み霞みけり

富士市 後藤 秋臣

山深き古刹の村に花ミモザ

愛知 森 恵子

処刑場の跡にシエラト甘き午後

安城市 唐澤 うに

空室と思ひし窓に春灯

奈良市 森本 延代

西村 和子選

艶間に遠きともがら花筵

名古屋市 山内 三雅

△評▽上機嫌で花見酒を楽しんでいる面々を改めて見た時の思い。「ともがら」の中に自分も含まれている点に俳諧味が漂う。

都府楼の帰りの道もきんぼうげ

福岡市 山本 真弓

△評▽行きと帰りの道が違っていても同じでも、都府楼跡一面にきらりと小花が揺れている。

てんでんに翼広ぐる雪柳

東京 高木 靖之

車座に先生もいて卒業期

津山市 森下 弘

耕牛や前ゆくほかは考へず

富士市 後藤 秋臣

黄梅の枝垂るる谷戸の暮ごころ

越谷市 安居院半樹

永き日や妻のせつかち変はらねど

白井市 毘舎利道弘

幼子と電車見ている草朧

生駒市 林 ちづね

風光る歓声上がる遊覧船

横浜市 相沢恵美子

薄闇の門に灯れり花馬酔木

羽生市 岡村 実

井上 康明選

白き瀬に白き鳥くる仏生会

周南市 九内 千沙

△評▽釈迦の誕生日である4月8日、寺院では仏事が行われる。夜明けだろう、白い鳥が浅瀬を訪れるおらかな風景である。

たんぼぼや一つ残りし分譲地

秦野市 林 ち島

△評▽まだ売れていない分譲地が1区画ある。その区画はたんぼぼが一面に咲いているのだろう。

花万空石材店のテント二基

京都市 根来 滋

薄公英の絮飛ぶフェリー待合所

東大阪市 福井 範子

生きるとは一気呵成や大ふぐり

横浜市 菅沼 葉二

卒業歌ひとり聞きぬる保健室

東京 徳原 伸吉

イランともつながる空か鳥雲に

東京 野上 卓

おにぎりは大きめ四つ新社員

土浦市 今泉 準一

約束のふらごで待つ揺れて待つ

山梨市 浅川 青磁

落ちてなほ闇よせつけぬ白橋

岸和田市 妙中 正

片山由美子選

総ガラス張りの市庁舎よなぐもり

和歌山市 曾根 澄子

△評▽せっかくのガラス張りの庁舎なのに何も見えない。「よなぐもり」は黄砂で日光がささきられ、どんよりしていることをいう。

道の辺にささき合へる重草

尼崎市 森下久美子

△評▽道はたに咲いているスマイルが揺れて、ささきあっているように見えたというのだ。

囀りや音楽室の窓を開け

東久留米市 矢作 輝

普段着のまま花人となりけり

川口市 高橋さた子

一人来てぶらんこにのる男の子

越谷市 安居院半樹

しやぼん玉はせて青空光らせて

前橋市 木下美樹枝

名草の芽競ふこと強ひらるる世に

水戸市 永井 弘子

くちびるを真一文字に卒業す

東京 東 賢三郎

麗らかな積木の中に子の眠り

越前市 加藤 隆規

開演を待つ静寂や春の宵

相模原市 はやし 央

調べの鼓動

鐘供養

星野高士

俳句をやっていたからこそ、知ることができた言葉がある。その一つが「鐘供養」だ。鐘供養は東京・品川寺のもの、和歌山・道成寺のものがある。今回は品川寺の方を説明する。品川寺は東京都品川区にあるお寺。京浜急行・青物横丁駅のすぐ裏手にある。ここで毎年5月5日に開かれるのが鐘供養だ。明治のころ、品川寺の鐘は万国博覧会で展示するためバりに持ち出された。ところが展示後に行方不明に。当時のことなので管理もい加減だったのだろう。数十年後、なぜかジュネーブの博物館にあることが判明し、返還されることになった。ようやく鐘が品川寺へ帰ってきた。この日を記念して、毎年、鐘をついて読経をする会をしている。これが鐘供養だ。旧東海道のお寺でもあり、青物横丁近辺にお住まいの方も、近くに運命的な鐘があることを知らなかったかもしれない。座について供養の鐘を見上げけり。当時の任職に鐘供養に呼ばれた際に、高浜虚子が詠んだ句。静かにつられた鐘を見上げつつ、波瀾万丈の旅に思いをはせている。現在、品川寺の境内には、この句の句碑が建てられている。品川寺とはこれ以来のご縁で、鐘供養の際には毎年句会が開かれ、私の俳句結社「玉藻」が主催している。虚子が見上げた鐘を、今は私が見上げています。よく見ると鐘には少しひびが入っている。東京からパリ、ジュネーブと異国の地を旅してきた鐘だ。人知れぬ苦勞があったに違いない。(ほしの・たかし「俳人」)